

St. Luke's International University Repository

ディシジョンエイド開発の現状，普及への課題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 加奈子, 米倉, 佑貴, Yamamoto, Kanako, Yonekura, Yuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00016552

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



【第26回聖路加看護学会学術大会：シンポジウム】

ディシジョンエイド開発の現状，普及への課題

座長：山本加奈子，米倉 佑貴

近年，情報と価値観に基づく意思決定の重要性が増している。しかし，保健医療に関する情報は専門性の高さから，情報を収集し，その情報を理解することは難しい。また，自分の価値観を明確にして意思決定をすることも多くの人が難しいと感じている現状がある。意思決定ガイド，ディシジョンエイドは，利用可能な選択肢を提示し，それぞれの選択肢のメリット・デメリットに関するエビデンスを整理するとともに，意思決定をする本人の価値観を明確にすることを助けるツールである。ディシジョンエイドは欧米諸国を中心に開発されており，日本でも徐々に開発が進んでいる。本シンポジウムでは日本国内においてこれまでにディシジョンエイドを開発し，臨床，現場で活用してきている4人の演者から，開発の過程や活用の状況が報告された。

一人目の登壇者の青木頼子氏（富山大学）からは「脳卒中中で入院した高齢者の「退院先を考えるガイドブック」として，試作版の開発からガイドの内容妥当性の評価・修正のプロセスについて報告があった。続く二人目の登壇者の青木裕見氏（聖路加国際大学）からは「大人のADHDの治療選択のためのガイド」として，ニーズ調査からフィールドテストの結果までの報告があった。三人目の登壇者の江藤亜矢子氏（小山嵩夫クリニック）は「ホルモン補充療法を行うかを決めるためのガイド」として，ガイドの開発過程，ガイドの内容，作成後の普及に向けた活動について報告された。最後の登壇者である藤田美保氏（昭和大学横浜市北部病院）からは，「プラセボ対照ランダム化二重盲検比較デザイン」の治験参加を検討する患者さんのための意思決定ガイド」として，

治験における共同意思決定（shared decision making：SDM）の重要性，ガイドの紹介および，ガイドの治験実施時の実施可能性についての調査結果が報告された。

シンポジストからの報告後，開発過程における困難や開発後の更新，普及に向けての戦略などについてディスカッションが行われた。

ディシジョンエイドの活用方法のひとつに，知識提供がある。また，対象者の知識が向上した結果，対象者が自分の価値観を医療者に伝えやすくなり，話し合いが促進される効果もある（Stacey et al., 2017）。言い換えれば，SDMを促進させる目的にもディシジョンエイドを活用することができる。

国内で開発されているディシジョンエイドはまだわずかであるが，今後も患者の価値観やニーズにあったディシジョンエイドの開発が求められる。また，開発されるだけでなく，実際に活用され，普及し多くの対象者の意思決定が支援されるように，実装の結果を明らかにしていくことが重要である。臨床や現場において，対象者の意思決定を支援する場面は多いが，対象者を支援できる医療者を育成することは課題のひとつである。また，対象者を支援する医療者は多職種であることを考えると，医療チームでのディシジョンエイド開発や活用を進めていくことも重要である。

引用文献

Stacey D, Légaré F, Lewis K, et al. (2017) : Decision aids for people facing health treatment or screening decisions. *The Cochrane database of systematic reviews*, 4 (4) : CD001431.